

連合軍の空襲激化に伴うドイツ軍需生産の 損害増大と労働配置 1944/45 (下)

中 村 一 浩

Kazuhiro NAKAMURA

目次 (承前)

3. 軍需生産の集権化
4. 生産力の低下
5. 空襲による損害

[Kurzfassung]

Der deutsche Arbeitseinsatz unter zunehmenden Bombenangriff 1944/45 (Teil 2)

Im Februar 1942 übertrug Hitler Albert Speer das Reichsministerium für Bewaffung und Munition und schuf für ihn die Position eines „Generalbevollmächtigten für Rüstungsaufgaben im Vierjahresplan“. Eine straffe und wirksame Lenkung der Herstellung von Kriegsmaterial auf der Ebene der Betriebe versprach sich Speer von seinem System „Selbstverantwortung der Industrie“. Bis zum Sommer 1944 entstanden 21 Hauptausschüsse und 12 Hauptringe, untergliedert in eine Reihe von Sonderausschüssen und Sonderringen, die alle von industriellen Führungskräften, zum Teil in Personalunion, geleitet wurden. Der Vorteil der industriellen Selbstverantwortung lag in der unbürokratischen Arbeitsweise der Ausschüsse und Ringe, die sich auf das Talent vieler Unternehmer und ihrer leitenden Angestellten zur Improvisation stützten.

Die Flächenbombardierungen, die bis zum Sommer 1943 die Wohngebiete der Industriestädte zerstörten, verfehlten das Ziel, die Zivilbevölkerung zu entmutigen, sondern stärkten eher den Willen zum Durchhalten. Danach versuchten die alliierten Luftwaffen, die deutsche Rüstung lahmzulegen. Durch die Offensiven gegen die Verkehrsanlagen ging der Wehrwirtschaft zusätzlicher Transportraum verloren. Schließlich zerbrach der Mangel an Treibstoff das Durchhaltevermögen der Wehrmacht.

3. 軍需生産の集権化

ドイツの工業生産の推移を見ると、1939年と1944年を対比すれば、総生産は約1.3倍に伸びており、生産財生産も約1.5倍に伸びているが、投資財生産は逆に0.38倍、消費財生産は約0.85倍へと低下している。その一方で軍需生産は、4.95倍へと激増しているのが前掲表1から判明する。このような傾向は、戦時期に於てはごく自然な成り行きであるが、英米軍の空襲の漸次激化する中で、軍需生産の伸びはどのようにして達成されたのであろうか。

1942年2月8日に航空機事故で死亡した辣腕の軍需相フリッツ・トートの後任となった¹アルベルト・シュペーアは、緊迫する戦況と低迷する軍需生産の推移を打開する為、産業界の首脳達との協力関係の強化を図ることとし、ナチ党大管区指導者や党機関からの干渉を極力排し、個別企業内に於ける裁量を幅広く認め、相応の企業利益も保証することにより軍需生産の最大効率

キーワード：アルベルト・シュペーア、軍需生産、軍需省、絨毯爆撃

Stichwörter：Albert Speer, Kriegswirtschaft, Rüstungsministerium, Flächenbombardierung

化を達成しようと企てたのである。加えて彼は、軍需生産を統括する軍需省と産業界の協力関係への国防軍及び官僚組織の介入を極力排除し、軍備計画の策定、原料や半製品の調達から労働力の統制に至る迄軍需相の専権事項と位置付けることを希求した。ヒトラーは、四ヶ年計画受託官として絶大なる権限を振るってきたゲーリングとの摩擦を回避する為に、「四ヶ年計画軍需総監 (Generalbevollmächtigte für Rüstungsaufgaben im Vierjahresplan)」なるポストを1942年2月にシュペーアの為に既に新設していた。同年4月初旬に至りシュペーアは、四ヶ年計画の内部に軍需生産の計画機関を設立するようゲーリングを説得し、これが「中央計画会議 (Zentrale Planung)」として結実することとなった。²

この中央計画会議は、シュペーア (議長) のほか、航空省次官エアハルト・ミルヒ (Erhard Milch)、四ヶ年計画次官パウル・ケルナー (Paul Körner、ゲーリングの代理者)、後には経済相ヴァルター・フンクが構成員となり、ゲーリングが干渉を断念したこともあり、従前四ヶ年計画の原料配分管轄部門が実権を握っていたのが、やがて中央計画会議を媒介として軍需省がこれを手中に収めることとなった。更に、同年5月にOKWの軍備局 (Rüstungsamt) を軍需省に併合し、国防軍に残っていた国防経済局 (Wehrwirtschaftsamt) を翌年初めに解体した。同年9月2日付のヒトラーによる「戦争経済の集約化に関する布告³」は、生産及び原料統制に関する経済省の権限を軍需省 (「ライヒ軍備・軍需生産省 (Reichsministerium für Rüstung und Kriegsproduktion)」と改称) に移管するよう命じた。かかる推移がシュペーアの思惑通りに実を結んだのが同年9月16日の組織改編であり、中央計画会議は軍需省の計画局 (Planungsamt) として傘下に収められた⁴のである。

4. 生産力の低下

1944年2月の時点でドイツの航空機生産能力の70%が空襲により破壊されていた⁵深刻な状況に直面し、差し当たりシュペーアは戦闘機の生産増強に注力し⁶、機種を絞り込み⁷大量生産に徹する途を選択した。同年4月の生産高は1月のそれを上回り、7月になるとほぼ倍増するに至った。かくしてゲーリングは、航空機生産全般を軍需省に移管することを余儀なくされた⁸のである。

既にシュペーアの前任者たるトートが着手していたことであるが、軍需生産の現場を党の柵から解き放ち、軍需産業に対して自律性と自己責任を求める改革をシュペーアは積極的に推進することとなった。先ず1944年夏までに21の中央委員会 (Hauptausschüsse) と12の中央企業連合 (Hauptringe) が設置され、それらは更に一連の特別委員会 (Sonderausschüsse) と特別企業連合 (Sonderringe) に細分化された。これらの会議の指導者には概ね工学者ないし技術者が向いていることが後に実証されたものの、彼等の過半数は所謂雇われ経営者であって、オーナー経営者ではなかった。シュペーアは、これらの会議の指導者達を、生産計画の履行義務を個別企業を拘束する命令に転化するという任務の遂行機関と見做していた。これらの委員会が軍需生産を行なう事業所を統括し、他方企業連合は下請け企業のカルテル的連合体を意味していた。とりわけ企業連合は、人脈を背景として既存の企業団体の重要な後ろ盾となっていた⁹。このような産業界の自己責任体制の長所は、疑いもなく多くの経営者や管理職たちの才能に支えられた委員会や企業連合の官僚的でない働きぶりであった。しかし、他方ではそれらの担い手達の視野が余りにも戦車や潜水艦や戦闘機などの生産高指数に限局され易いという欠点も見られた。また、緊急性に従って段階付けられたメーカーへの一方的な生産増強命令は、原料産業、下請け企業、製造業

の複雑に錯綜した関係を顧みないものであった。シュペーアが戦後認めたように、工作機械製造業を顧みないというより重大な懈怠が生じていた¹⁰。1941年から翌年にかけて、工作機械の設備が思うに任せなくなった。特殊工作機械の生産活性化が手遅れにならなかったのは、流れ作業の迅速な拡大と多交替制への移行を強力に推進したからである。¹¹

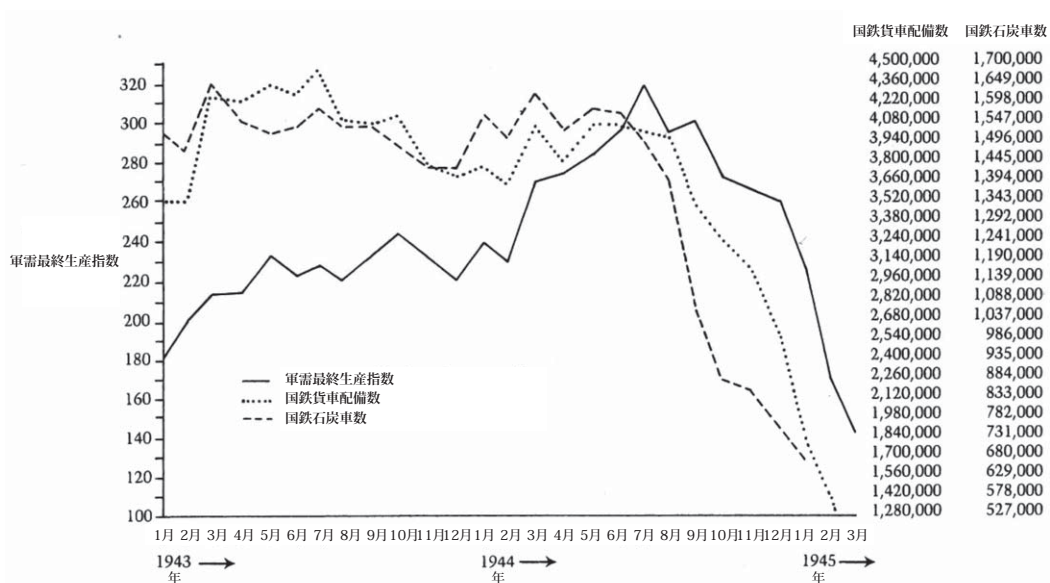
5. 空襲による損害

1943年夏迄に実施された絨毯爆撃 (Flächenbombardement) は工業都市¹²の住宅地を破壊したが、民間人の厭戦気分を助長するという目標を達成することには失敗し、抗戦意志を強める逆効果をもたらした。空襲により蒙った損害¹³は、とりわけ外国人の労働配置の強化により除去された。その後連合軍は、重要な下請け工場を潰すことによってドイツの軍備を機能不全に至らしめようと試みた。中でもボールベアリング工場は、軍需生産の中核部分をなすものであり、とりわけシュヴァインフルトに密集立地していた¹⁴が故に、中心的な爆撃目標とされた。¹⁵

1944年春の空襲は、ドイツの軍需生産の破滅をもたらした。直径63mm以上のボールベアリング生産が6週間のうちに3分の1未満に激減してしまったからである。備蓄はすぐに枯渇してしまっただが、スウェーデンやスイスからの補充は殆どできなかった。だが、1944年4月初旬に至り、ボールベアリング工場への爆撃が突如停止された。連合軍は、ドイツが既に製造拠点の疎開に成功したものと誤認した為である。2月から3月にかけての激しい空襲がそれ以降も継続されていたらドイツの軍需生産はたちまち瓦解していただろうとシュペーアも後に述懐している¹⁶。かくして、ボールベアリング生産の隘路は克服されたのであった。5月以降はヒドラジンなどの燃料を製造する工場が空襲の重点目標となった。これに伴い、秋迄に製造プラントの修復の為に35万人もの労働者が軍需省により動員された。しかし、そうした労働者の中には、他の部門で緊急に必要とされる熟練工が多数含まれていたのである。また、軍事的に重要な工場から設備を撤去して空襲によって破壊された水素化学工場の応急修理の為に活用することも躊躇わなかった¹⁷。このような破壊と修復がいたちごっこの様に繰り返されたものの、1944年9月に至る迄はかろうじて航空燃料生産を維持することができた¹⁸。同年8月にソ連軍によりルーマニアの油田が失陥するや、ドイツ空軍の活動範囲が狭められた。燃料工場を防衛しうべき戦闘機群は、空の燃料タンクのまま滑走路上に駐機していたのである。必要とされる燃料のうちほんの一部しか供給されなかった (表4参照) ので、陸軍の機動力も徐々に失われていった。奇怪なことには、航空機生産はますます増強され、欧州大戦勃発時 (1939年) には僅か771機の戦闘機を数えるに過ぎなかったのが、1944年9月だけで3375機もの新造戦闘機が引き渡されたのである。

このような動きと並行して、連合軍の空襲は軍需生産の基盤たる輸送網の破壊を進めていた (図1に両者の凋落が鮮明に読み取れる)。鉄道の分岐点や操車場、橋梁などが爆撃目標となり、これにより堅固且つ信頼性の高かった国鉄の組織が長期にわたって摩耗していった。また、ヒトラーや側近たちはこの期に及んでもユダヤ人の絶滅収容所への東方移送を中止して追加的輸送力を確保するなどという発想の転換が出来なかったので、輸送事情は悪化の一途を辿った。代替燃料 (木ガス) を利用したトラックでは、そもそも鉄道などに代わる大量貨物輸送手段にはなろう筈もなかった。破壊された閘門や水中に落下した橋梁により、内陸水運は阻害された (表9)。引き続き空襲の目標は、ルール地方からの石炭供給を途絶させることへと移っていった。ドイツの軍需産業は、他の参戦国よりも石炭 (エネルギー源であり、工業原料でもあり、スウェーデン鉍石調

図 1 軍需生産と鉄道輸送実績の推移 1943-45



出所 A. C. Mierzejewski, The Collapse of the German War Economy, 1944-1945. Allied Air Power and the German National Railway, Chapel Hill & London 1988, p.198.

表 9 内陸水路経由の石炭輸送の推移 (石炭・褐炭合算)

(単位: 1000トン)

炭鉱採業年度/月	輸送量	ルール	オーバーシュレージェン
1940/41	34,234	25,825	3,600
1941/42	34,920	27,561	3,444
1942/43	39,367	30,495	3,865
1943/44	30,182	23,071	2,880
4月	3,293	2,416	413
5月	2,701	1,926	312
6月	3,007	2,141	374
7月	3,207	2,337	391
8月	2,659	2,080	248
9月	2,081	1,723	103
10月	2,309	1,898	126
11月	1,713	1,446	90
12月	1,934	1,587	118
1月	2,168	1,578	159
2月	2,345	1,804	217
3月	2,765	2,035	329
1944/45			
4月	2,672	2,001	315
5月	3,112	2,207	446
6月	3,059	2,207	421
7月	3,131	2,352	317
8月	2,919	2,134	386
9月	2,283	1,752	227
10月	1,251	724	269
11月	979	433	379
12月	422	—	213

出所 Ibid., p.193.

達の為にはかけがえのないバーター輸出品でもあった)への依存度がかなり高かったからである¹⁹。また、1944年11月以降になると、ルール地方の操車場や積出港を標的にした猛烈な爆撃により、工業中心地へのルール産石炭の移出が間々ならなくなった(表10-1及び10-2参照)。このように輸送手段の破壊によって惹起された危機的な石炭不足(表11参照)は、まさしくドイツ軍需産業の根幹を打ち砕いてしまったのである。目先の目標に対する間欠的爆撃(戦術爆撃)しか遂行できなかったドイツ空軍と比較すれば、長期にわたって継続される爆撃によって敵国の継戦能力を漸次損耗させ、終局的にはこれを根底から掘り崩す作戦(戦略爆撃)を選択し(え)た英米空軍の慧眼と力量の優位は明らか²⁰であろう。

表10-1 ドイツ国鉄の貨車配備状況の推移と石炭・褐炭輸送

炭鉱採業年度/月	貨車総数	石炭	褐炭
1940/41	48,373,843	16,755,046	7,021,224
1941/42	44,321,721	16,566,984	7,179,648
1942/43	47,947,837	17,704,156	7,872,571
1943/44	48,401,403	18,332,517	8,029,474
4月	4,212,504	1,543,563	724,882
5月	4,314,253	1,510,917	737,670
6月	4,244,053	1,542,558	719,569
7月	4,425,408	1,587,478	727,545
8月	4,147,549	1,562,702	714,775
9月	4,053,384	1,549,386	692,166
10月	4,140,404	1,487,124	636,948
11月	3,814,007	1,426,495	572,132
12月	3,672,800	1,435,911	567,684
1月	3,773,474	1,567,836	640,645
2月	3,626,078	1,506,356	607,162
3月	3,977,489	1,612,191	688,296
1944/45			
4月	3,805,508	1,527,737	668,427
5月	3,992,116	1,596,763	672,884
6月	4,007,934	1,585,631	664,626
7月	3,969,625	1,480,723	667,521
8月	3,940,944	1,393,692	666,957
9月	3,442,133	1,086,075	612,272
10月	3,241,506	883,443	568,058
11月	2,976,302	850,323	542,347
12月	2,570,707	888,779	508,235
1月	1,877,738	690,573	475,183
2月	1,069,322	—	—

表10-2 3大産炭地別に見たドイツ国鉄の石炭輸送車配備状況の推移

年	ルール	ザール ^a	オーバーシュレーゲン	合計
1943				
1月	630,253	141,749	622,208	1,524,162
2月	572,756	140,144	630,613	1,462,673
3月	645,983	156,855	719,774	1,659,237
4月	607,103	150,487	655,464	1,543,563
5月	565,795	152,747	665,949	1,510,917
6月	565,214	158,574	691,447	1,542,558
7月	569,988	163,072	725,830	1,587,478
8月	561,201	161,074	711,011	1,562,702
9月	572,905	158,644	691,651	1,549,386
10月	555,527	151,528	658,349	1,487,124
11月	501,732	152,961	661,614	1,426,495
12月	543,638	158,350	620,589	1,435,911
1944				
1月	618,420	167,008	654,460	1,567,836
2月	582,193	148,762	657,221	1,506,356
3月	618,566	156,930	709,591	1,612,191
4月	580,211	150,263	684,001	1,527,737
5月	591,430	149,682	734,392	1,596,763
6月	605,006	155,178	706,485	1,585,631
7月	586,117	146,640	633,170	1,480,723
8月	565,143	135,470	582,330	1,393,692
9月	436,246	52,068	524,222	1,086,075
10月	252,595	35,967	532,562	883,443
11月	232,210	49,890	503,741	850,323
12月	253,330	9,024	558,198	888,779
1945				
1月	299,632	10,509	315,175	690,573
2月	215,368	15,835	65,773	318,542
3月	66,129	15,197	72,570	368,753

出所 Ibid.,p.192.

表11 輸送障害により惹起された石炭不足²¹
(単位: 100万トン)

時期	国鉄		内陸水運		合計
	不足	累計	不足	累計	
1944年					
8月	1.7	1.7	—	—	1.7
9月	4.8	6.5	0.25	0.25	6.8
10月	5.7	12.2	0.89	1.1	13.3
11月	5.9	18.2	0.96	2.1	20.3
12月	5.6	23.8	0.73	2.8	26.6
1945					
1月	8.7	32.5	1.2	3.9	36.5

出所 Ibid.,p.194.

¹ この間の経緯については、シュペーア、『第三帝国の神殿にて ナチス軍需相の証言』(Albert Speer, Erinnerungen, Berlin 1969), 第14章参照。ヒトラーは、トートと悉く対立していたゲーリングがトートの軍需省を支配下におさめようとしていたことを予め予見していたかの如く、機先を制してシュペー

アを後任に任命し、その権限拡大を矢継ぎ早に認めていったのである。

² F.Blaich,Wirtschaft und Rüstung im „Dritten Reich“,Düsseldorf 1987,S.45.

³ Erlaß über die Konzentration der Kriegswirtschaft vom 2.September 1943,RGBl.I,529.

⁴ Blaich, 2.2.0.,S.46.

⁵ Ebenda.

⁶ 前掲表7-1, 7-2に一目瞭然に見られるように、とりわけ防空の要である戦闘機の損失が激増しているのも、これは当然のことであった。

⁷ 具体的には、メッサーシュミット Me262や Me162, ハイネケル He177などの先進技術を用いた迎撃機の生産が優先された。

⁸ Ebenda.

⁹ たとえばザールラントの製鉄業経営者ヘルマン・レヒリンク (Hermann Röchling) は、製鉄中央企業連合議長であり、且つ全ての製鉄業者を包括するライヒ製鉄連盟の指導者でもあった。これら2つの団体の代理者は、ヴァルター・ローラント (Walter Rohland) であった (Ebd.,S.47)。

¹⁰ 1939-44年のドイツに於ける工作機械の生産台数は、次のように減少していた (Ebd.,S.48)。

1939年：199,361 1940年：199,490 1941年：197,960 1942年：165,969 1943年：140,084
1944年：110,377

¹¹ Ebenda.

¹² ドイツ国内の爆撃目標の分布は、表5-1及び表5-2参照。

¹³ 1944年に入ってから的人的・物的損害の推移は、表6及び表8参照。

¹⁴ 同地以外に、レーゲンスブルクやシュトゥットガルトのボールベアリング工場も爆撃目標とされ、1944年2月20～25日にかけての米空軍による航空機製造拠点 (アウグスブルクのメッサーシュミット工場) と同時に実施された空前の大空襲 (爆撃機6000機と直掩戦闘機3670機を動員) では、これら目標に対して合計2万トンの爆弾が投下された (J.フリードリヒ (香月恵里 訳), 『ドイツを焼いた戦略爆撃』 (J.Friedrich,Der Brand.Deutschland im Bombenkrieg 1940-1945,Berlin 2002), みすず書房 2011年, 93頁)。同書は、空襲下のドイツの状況を、各種兵器、戦略、国土の荒廃、防衛体制、国民感情、文化財保護の様々な観点から詳細に記述したものであり、空襲の実相を知る上では極めて有益である。

¹⁵ Blaich,a.a.O.,S.51.同時に米国政府は、スウェーデンに対して、ドイツ向けのボールベアリング輸出を停止するよう政治的圧力を行使していた。

¹⁶ シュペーア, 前掲書, (下) 72頁。

¹⁷ Blaich,a.a.O.,S.52.

¹⁸ 1944年9月になると、表4に見られるように、燃料生産は大幅に落ち込んだが、同年11月には一時的にせよ急激な生産増加が達成された。

¹⁹ Ebenda.

²⁰ R.J.Overy,The Air War 1939-1945,London 1980,p.12.

²¹ 不足とは、石炭出荷実績の対前年度比較から推計されたもの。